
ひとひら、流れと、香り立ち。

時雨水氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとひら、流れと、香り立ち。

【Nコード】

N9620V

【作者名】

時雨水氷

【あらすじ】

トラックに撥ねられ死亡した主人公。 そんな彼女（体は男）が再び産声を挙げたのは、魔法や魔物が大手を振って闊歩する、いかにもファンタジーな異世界でした。 しかしこれらは、胸躍る冒険劇などではなく、胸を焦がす恋愛も皆無な物語。 没落貴族の長男に生まれ、下位の魔術とされる【形術】を授かってしまった（チートなにそれ美味しいの）、魔具士を目指しつつ平穏であることを祈る少年の徒然なる日々。 ちょっとアホの子な冷静沈着（？）系主人公が好きな方はぜひ。

1. 沈みて浮かぶ。

私は死んだ。

覚えているのは眼前に迫った大きな光とブレーキの音のみ。(大き
さから言ってトラックだろう)

一瞬の激痛の後、何も感じなくなった。人は許容範囲外の痛みを
感じるとシャットダウンすると言うが、まさか自分の身で体験する
ことになるうとは思わなかった。そもそもなぜ私は撥ねられたの
だろうか、と考えてみるも、普通に法に従って横断歩道を歩いてい
ただけなので思いつかなかった。

つまりトラックのほうに原因があったとしか思えず、そう考えてし
まうと運転手さんに哀れみしか感じられなくなった。なぜなら人
にぶつかったぐらいでトラックが損傷するとも思えないし、なによ
り突っ込んできた横断歩道には仕事帰りの人々が大量に突っ立って
いたのだから。どういう罪状になるのだろうか、そしてどれぐら
い重くなるのだろうか？ もしもシャーマンだか巫女さんだかが本
当にいたとしたら、私の分だけは罪を軽くしてくれるように頼めな
いだろうか。

無論私とて敵に慈悲をかけられるほどの聖人君子ではない。だが
しかし、昨今の私は別に死んでも良いやと思っていたのだ。しか
し何も考えず自殺ができるほど子供でもない。なぜなら自殺とい
うやつは非常に「周りの迷惑」という物を引き連れてくる訳なので
「いや、これは関係がないか。 閑話休題。

とりあえず私は仕事場でストレス解消の道具として使われており)

いわゆる虐めだ）、そろそろ精神的にも限界が来ていたところだったので、むしろあの運転手さんは私にとって救世主のような存在に昇華していたのである。しかし己の惚れていた男が、売れ残りの四十もかくやという負け犬と遊ぼうとしたから（もちろん大人らしくお断りした）といって、負け犬のほうを怨むのはどういった訳であろうか。

と、そこまで考えた私は気づいた。死んだというのに己の思考がまだ残っていることに。そして沈んでいっている事に。道路の上なのだから、沈むなど通常ではありえないのだが、現にゆつたりと深いほうへと進んでゆくのを感じられる。そして深く深く行くほどに、暖かくなつていく事がわかった。この中は非常に心地よく、まるで水の中にいるように思えた。

母の羊水の中とはこのような物なのだろうか、とふと思った。眠りに誘われているようで、少しづつ思考が鈍く重くなっていく。それと同時に己がなくなっていくように思えた。それを残念に思い、また、底になにがあるのかという好奇心も手伝ったのか、眠ってしまう事はどうにか避けられた。

ゆつくりと沈み、ふとそれが止まった瞬間、大きな何かが自分を見ていることに気づいた。ある訳もない心臓が止まったような気がしたが、それが案外優しく触れてきた事に安堵した。

「眠らないのか、

と撫でながら問いかけてきたその声に、恥ずかしながらときめいてしまった事は秘密だ。口付けした事すらない売れ残りにだってプライドはある。

「眠る、って？」

そもそも眠る事になんの意味があるのかすら知らないので問いかけてみた。

「死した際にて命は眠り、疲れを癒す。記憶を溶かし、次の生の糧となし、真白の形で再び生まれる。

「お前は並より疲れているようだが、眠りたいとは思わないのか？」

「眠りたいとは思いません、

探究心は何にも勝る欲望だ、とどこかで読んだ事を思い出した。

「眠りの欲求より、自己を確立する欲望の方が強いのです。眠らねばならないのでしょうか？」

言葉を聴いて、それは密やかに笑った。

「いや、お前がそれでいいというならそれでいい。別段お前が初めてという訳でもない。…そのままそこで時を待てば、いつかまた浮き上がるだろう。それが新しい生の始まりだ。それまで好きにしているといい。

それが離れていった。残されたのは、緩やかにたゆたう暖かな水らしきものと、周りであつごめく、おそらくは魂達。失礼ながら、蛙の卵を思い出してしまったが。

…どれくらい時がたっただろう。途中で寝かけた事もあった。

すんでの所で止めたが。 またあの大きいものがきた事もあった。

まだ寝てないのかと少々あきれたように言われたのが正直納得い
かないけれど、ケンカを売るわけにも行かないので無難に答えてお
いた。 (私がそれでいいなら、と言っていたのはどこのどいつだ
と)

まわりがふわふわと浮いていき、新しいのが沈んでくるのを感じな
がら、ずっとずっと待っていた。 そしてようやく、己がふわりと
浮かぶのを感じた。

― まさか本当に己を保ち続けるとは思わなかったぞ。

呆れを通り越した声で、近づいてきたそれが言った。 大きなお世
話だ。 頑固の鬼と知り合い全員に言わしめた、私の根性を舐めて
いたそつちが悪い。 最後のほうは意地だったが。

― できる限り生まれるのを引き伸ばしてやったのだが、徒労に終
わったのは久しぶりだ。

お前のせいだ。 でかぶつが。 無論、賢い私は言わないが。

― 二回目の邂逅の際に言われた言葉がなければ、おそらくは寝て
しまっていたでしょうね。 ありがとうございました。

精一杯の恨み節。 尻尾を巻いたケンカ腰、とも言えるだろうか。

― それは…惜しいことをした。 次からは気をつけることにしよ
う。

返ってきたのは笑った言葉。 見事にかわされました。 これが大

人の余裕ってやつですか。

「まあ、それはもういい。ほら、そろそろ上が見えてきたぞ？言葉を受けて、上に意識を向けてみた。たしかに水は冷たく、明るくなってきている。」

「星の愛し子よ、良い生を。願わくは二度と、前のような目に遭わん事を。」

礼を言おうとしたが、上がる速度が急に速くなり、それに伴って光がまぶしすぎるほどになっていく。話などできる状態ではなかったが、まるでわかっているとも言つのように、水が撥ねる音を聞いた。

深い暗闇から見上げる、大きな人とも魚とも付かぬ姿を見た気がした。

そして私は、己の上げる産声を聞いた。

1・沈みて浮かぶ。 (後書き)

作者は投稿前に十二分に誤字脱字に気を配らせてはおりますが、もし何かを見つけた場合、お手数をかけますが報告してくださると嬉しいです。

次話からは一人称視点ではなくなります。

2・喧騒と、人々と。(前)

凍えそうな冬の朝。弛んだ空気の中、彼はクローゼットから適当に服一式を引っ張り出して身につけ、靴下とブーツを履いた。軽くこげ茶の髪の毛を櫛で梳き、後ろ髪を髪留めで纏める。チエツクが終わると、彼は鏡の前に立つてくるくる回り、かわいいと自負しているポーズをいくつか決めた。

我に返ってカーテンをどかすと、夜明けの二色に染まった空と白化粧を施された世界が見えた。眼下には小規模ながらも趣味のいい庭園が見えるはずなのだが、昨夜に雪が振ったらしく大部分が白色に埋め尽くされていた。ただ、彼はその殆どが冬の野菜だという事を知っているので安否の心配はしなかった。ほかの季節は普通の観賞植物が植えられているのだが、ここの冬は雪が沢山振る上、食料確保も少々困難になるので家庭菜園になるのだ。がちや、と観音開きの窓を少し開けると、澄み切った冷風と遠い喧騒が部屋の空気を塗り替えようともぐりこんでくる。それに答え、彼は頭の中の霞を振り払った。

…今日で彼は六歳となる。

叩き起こされる。着替えさせてもらう。鏡で自分のかわいさを再確認する。階下の洗面所で歯を磨き顔を洗う。そのままぐると窓の多い廊下をまわり、裏の小さいドアから食堂に入って朝食

を食べる。これがエリオット「ツカサ」シユヴェールの、朝の恒例行事である。

だがしかし、今日はその限りではなかった。

彼は珍しくも自分で起き、自分で着替えたのである。

「今日は、世界が滅亡でもするのでしょうか…」

「ひどくなーい？」

エリオットはソファに座りながら、その銀灰色の瞳を呆れにゆがませ目の前に居る翠目赤毛の少女に笑いかけた。

そう、彼は単純に特別な日ぐらいは気合を入れようとしただけである。無論、現在彼の目の前に立っているそろそろ16になろうというお付の少女、サラの驚く顔が見れるかなと淡い期待を抱いていたのは否定はしないが。だからといって世界滅亡は無いだらうと笑うと同時に、今日も悪態をついてくるその元気な姿に安心していたのも事実なのである。

…エリオットと「彼女」は、同一の存在ではない。彼は「彼女」を自分自身だと見ておらず、記憶という知識をいつでも引き出せる銀行のようなものとして扱っている。これは本人が望んだ事もあるが、主に「彼女」の常識に合わせて行動する事はデメリットにかならないからである。他の世界の知識があるという事がばれれば良くて珍獣扱い、悪くて実験体。二人が保有している知識のせいで大人びてしまうのは仕方が無いが、気をつけてさえいれば「ませた子」としか認識されない。現時点で全てを知っているのは信頼できると判断した父母とサラの三人だけである。彼らがどこま

で信じてくれているかは彼にはわからないが。

だから、基本的にはエリオットが行動方針を決めている。危機的状況などが発生した場合には「彼女」が出張ってくるが、そちらのほうが生き延びる確率が高くなると体が判断するせいだろう。現に二年ほど前に、魔物が溢れ返っている森ではぐれた時、パニックになってしまった彼から体の制御を奪い必要な行動をとっていた。

おかげで彼は食われる事も狂う事も無く、無事に家に帰れたのだ。

理由は分からないが、二人の考え方は基本的に同じであり好む行動もほぼ同じ。違う所をあえて上げるとすれば、彼は彼女より行動的で、「彼女」は彼より臆病なだけである。通常時の「彼女」の意識は眠っているのになにも問題点はないが、夢や何かのきっかけで「彼女」のトラウマが蘇ると意識が混ざってしまう事もある。だが、彼と「彼女」の意識は、基本的には上手く住み分けが出来ている。

…記憶がいくらか隠されている事は気になるが、エリオットは気にしない事に決めている。いくら自分自身であるとはいえ、良好な関係のためにもプライベートは尊重するべきだと分かっているからだ。逆にへそを曲げられて全拒否されてしまったら不都合な事の上ない。

「ひどくありませんよ、いつもどれだけ起こすのに苦労してると思ってるんですか。ご自分で起きれるなら毎朝そうしてくださいよめんどくさい。」

「…君、今誰に話しかけてるか分かってる？」

「ナルシストで救いようの無い変態野郎ですがなにか？」

「自分を棚に上げてのそのセリフ！」

彼はまるでお手上げだと言いたいがごとく諸手を挙げてソファに倒れこんだ。

エリオットとサラは使用人と主人の関係ではあるが、それ以前に興味が似通った親友でもある。つまりは好みや性癖などもお互い知っている訳で、こんな無礼にも程がある会話などまだ良い方と言えよう。悪口の理由としては、性格云々もあるが最初の頃に散々心労などをかけたせいもつとも濃厚だろうと彼は勝手に推測している。

「少なくともナルシストではないですよ。着付けの度に鏡の前で悦に浸ったきもい顔を見せられるこっちの身にもなってください。」

「嫌なら見なきゃいいじゃん。」

「目の前でやっておいて嫌なら見るな、は通用する訳無いでしょう。いいからとつと下りて来て下さい、朝食が出来てますよ。」

「へいへい」

窓の前からドアまで移動する。

「返事はハイでしょう」

「はいはい」

朝食は何かな、と思いつながら廊下に出る。やはり部屋よりは寒い

と思ひながら彼は上着の前を閉めた。 サラがそれに続きドアを閉めた。

「エリー様？」

「はあい」

「よろしい。」

サラはエリオットを愛称に敬称で呼ぶ。 理由はなんとなくだそうなので、彼もなんとなく放置している。

部屋に一番近い、裏手の小階段を下りてすぐ右の洗面所に入る。

サラはそのまま食堂の方に歩いていった。 上にも二つほど風呂場付きがあるのだが、流れを考慮した結果彼はそこを使う事にきめた。 朝は出来るだけ考えないほうがめんどくさがるの彼には都合がいいのだ。

顔を洗って歯を磨く。 「彼女」が使っていた物より利便性は低いが、これはこれで楽しいので彼は気に入っている。 そこから出て右周りにぐるっと歩き、中庭が見える通路を通る。 窓が多いこの小規模な屋敷は、煉瓦と暗い色合いの木で出来ており、落ち着いた色調の調度品ともあいまって趣味のいい一品となっている。 左に曲がって突き当たりの扉を開け、食堂に入る。

「父さん、母さん、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

短い猫っ毛のこげ茶の髪と、切れ長の翠の目をした女性が笑う。アリアーナ・シュヴェデル、エリオットの母にして国の最高貢献者の一人である。彼女の背は高く、対外的なイケメン系性格のせいで女性陣や特殊な趣味の男性からは熱狂的な支持を受けている。

本来は幼女にも負けないぐらいの乙女でお姫様嗜好なのだが、これはこれでかわいいので皆黙っている。

「おはよう。いい夢は見れた？」

コップを置きながら銀灰色の目を細めて笑う、硬い黒髪の男性が聞いてきた。マコト・シュヴェデル、亡国の王族の生き残りにしてこの屋敷の専業主夫である。こうなった経歴は実に単純で、他国に攻め落とされこの国に逃げ込んできた際に、以前から口説いていたアリアーナに事情を説明した際「守ってやるからどこにもいくな」と一見男らしいプロポーズと涙混じりの上目遣いに負けて婿入りしたという。きゅっと裾を摘んでいたのが決定打だったと幸せそうに苦笑しながら喋っていた姿は、まだ彼の記憶に新しい。身分だけならアリアーナの方が玉の輿、とも言えるこの結婚の妨害は主に彼女の狂信者達からのみであった。

マコトは裁縫や料理、庭弄りなど、本当に王族かとエリオットが聞きかえしたほどに庶民的な趣味を持っている。サラが居るとはいえ、趣味というだけで屋敷一つ回せる位の腕前を持っているのは未だに納得できていないが、これ以上ないくらいにお似合いな夫婦であるとエリオットは勝手に思っている。どこでもお構い無しにいちやつきはじめる所も含めて。

「んー、部屋いっぱい宿題が出された夢見た…」

思い出してしまい、エリオットは震えた。いくら内容は単純だとはいえ、彼もあの量にはさすがに戦慄を覚えたのだ。震えついでに椅子に登り、調節用のクッションの位置を正して座った。

「はは、それは怖いな。」

「あー、僕にもあったなあ。何十枚もあるテストを半時でやりなさい、なんてのも見たっけ。」

「やめてよ父さん、見ちゃうかもしれないじゃん。」

大人組が全員笑う。彼にとっては切実な問題なのだが、反論をするのを諦めた。準備が終わり、サラとマコトも座って食物の神に祈りを捧げた。

食後のティータイムが始まった頃、マコトが話し始めた。

「さて、エリー。今日は君の六歳の誕生日だ。」

「ん。」

マコトの国では「六歳」は大事な人生の節目であり、あるイベントが起きるらしい。エリオットは一年も前からその事を教えられていたが、彼がどんなにかわいくねだっても教えてくれなかったイベントだ。今朝は世界滅亡かとまで言われたのは、これに興奮す

ぎたせいもあった。

「前にも話したとおり、僕たちの一族にとって六歳というのは、非常に大事な節目だというのは覚えているね？」

言葉を選んでるようにマコトはゆっくりゆっくり話す。

「イエッサー。」

「というのね、大抵の場合において六歳の誕生日の、早くて半日あたりに僕たちは魔術を使えるようになり、それに伴って親の変化術が掛からなくなるからなんだ。」

はい？とエリオットは思ったが、一応最後まで話しを聞いてみる事にした。

「だから、六歳の誕生日の後、大体一週間あたりは何もさせず、新しい力になじむのを待ってから変化術を覚えさせるのが通例なんだよ。エリーは賢いから、変化術自体はすぐに覚えられるだろうね。そのほかの事は、おいおい覚えていけば良い。…なにか、質問はあるかい？」

「ねえ、父さん。」

とりあえず、エリオットはもっとも気になっていた事を聞く事にした。

「なあに？」

「私は人間ではないの？」

変化術とか完全に初耳です、と顔で語る。

「あれ、言っただけじゃなかったっけ。」

「聞いてねーよ……」

ごめんごめんとマコトが笑ったのを見てエリオットは脱力しテーブルに突っ伏した。アリアーナは笑っているマコトがかっこいいと眺めている。エリオットがもつと小さかった頃よりはマシになってきているが、今でこう抜けているのなら彼の母の中に居る弟か妹が来たらどうするつもりなのか。二年前の森の時の自分のように、彼や彼女が己の身を守る保証などないのに。彼はまだ見ぬ弟か妹に思いをさせて、いざとなればサラを巻き込めば良いと完結した。彼もアリアーナに任せておきたいのは山々なのだが、彼女は仕事が多忙なせいもあり抜けている所があるので、全面的なサポートが必須なのだ。

「そう、僕たちの一族は、母さんみたいな「人間」というものではないんだ。人間の形のほうが生きていきやすいから、こうしているだけ。僕たちには混血とか関係ないからね、もちろん君も生まれた直後は一族の姿をしていたよ。」

「んー、一族の姿ってどんな姿？」

「解けてからのお楽しみー」

「とりあえず、ヒント頂戴。」

「んー、まあ、いいかな。なんとなくか、魔物っぽい。 分類的

には魔族だけだ。」

魔族。人間より色々な意味で強いが、強いせいで繁殖能力も低く単純なぶつかり合いしかできない固体が多い猪突猛進な種族である。エリオットが通っている学校の教科書によると、最近では絶滅寸前になってきたせいで知恵を使う固体が増えてきているが、人間ほど使いこなせていない上繁殖をあまり重要視していないせいで、数が未だに減り続けているという。

「あの…、予想の斜め上を、行っただけですけど…。」

彼はもはや起き上がれないくらいに脱力した。森の事件が発生した理由を理解したと同時に、気が重くなってしまったのだ。おとなしい所や愛を知っているあたりは人間らしいので、おそらく知恵を使う固体とやらだろう。だが驚いた事には変りはない。弟が妹は絶対に自分が守ると彼は固く誓い、最初に来たのが「彼女」の記憶を持つてる自分で良かったと安堵した。

「なんだと思ってたの？」

「エルフとかー、精霊とかー、そういうかつこいい系だったらよかつたなーって。」

「夢は見るだけならタダですものね。」

いままで静かだったサラが茶化してきた。

「いーい度胸だなあ嬢ちゃん…さあ、表に出るがいい。」

彼は椅子にひざ立ちしてサラを見下ろした。サラは挑発するよう

に、微笑を湛えながらエリオットの視線を受け止めた。

「はいはい、喧嘩しないの。まあ、本題は力が発現してから話すとして、今夜は誕生日パーティーでしょ？ お手伝いさん達が来るといつても、今日はいつもより盛大な物になるから君らのお世話する余裕がないんだよ。ちょうど良いし、母子水入らずで遊びに行ってきたらどうかかな？」

「でも、母さんお仕事あるし、疲れてるんじゃない？」

「いや、そんな事はない。」

アリアーナが言った。

「かわいい息子と遊べば疲れも吹っ飛ぶ…というか、今日を丸々休みにするために仕事を殆ど終わらせてきたんだ。これで嫌がられたら母さん泣いてしまうよ。」

アリアーナの仕事はかなりの激務であり、一日まるまる休みを取れるなんて並大抵の努力では無理な事をエリオットは知っていた。そして自分のためにそこまでしてくれる事に感動を覚え、今日のことんまで「母」としての喜びを感じさせてやるうと心に決めた。

「母さん」

「ん？」

「だいすきっ！」

エリオットは心の底からの笑顔を彼女に送った。

蕩けきっている

端正な顔を見て、彼はとりあえずはよしとした。

2・喧騒と、人々と。(前)(後書き)

森の事件 〃 マコトさんと四歳のエリオットが森に遊びに行った際に、エリオットが木陰で昼寝しているのに気づかないで帰っちゃった事件。別の町での買い出しから帰る最中で、荷馬車に積まれている荷物の中で寝てるんだらうと勝手に推測した結果、二人の帰りを待っていたアリアーナに殺されそうになった。エリオットは叫ばず動かず木の上の上っていた所を保護されて、傷一つなく帰れました。

もちろんマコトさんはエリオットの事をちゃんと愛してますが、種族性の為、弱い固体に「気をつける」事が難しいのです。エリオットは「彼女」の知識があるため、その限りではないのですが。

3・喧騒と、人々と。(後)

2・喧騒と、人々と。(後)

エリオットの住んでいる場所は、大きな島を一つ丸々国とした所である。二大陸のマテラとガイアとは、近いとはいえないが遠いというほどでもない微妙な位置にある。名は水の都レナルア。神々が息づき地を歩くこの世界において、宗教観が全体的に薄い珍しい国である。また、この島には、昔からこのあたりを支配していたレナルという戦闘民族の一族の血が純血のまま受け継がれており、一般市民でもそこそこ身体能力が高い事で名をはせている。レナル一族が、人間には珍しい縦長の瞳孔を持っている事は有名だ。

殆どの建物は、四角形の壁とゆるくカーブのかかった屋根を携えている。中身はエリオットの屋敷のように暗めだったり、別の家の様に色とりどりだったりバリエーションがあるのだが、外見はすべてが白と青で統一されている。また、エリオットの家と同様に、大概の建物は窓が多い。そのせいか庶民でもサンルームのような部屋を持っている事が多く、貴族ともなればそこに個人用のプールが付いていたり夏は涼しくできる工夫がされているのは当たり前となっていた。エリオットの屋敷は他の貴族の物と同様、本来屋根のある部分にドーム型のサンルームがつけられている。冬は暖かく、夏は窓を開け放ち涼しくさせられるので、彼はその隅にあるソファが大のお気に入りだった。

島国であるが故に、この都は上と横に延びる。ただ、王宮が出来た頃からは、それ以上上に行くなんてとんでもないとばかりに都は波紋のように海上に広がっていった。本来の島に当たる部分では、大小の澄んだ水路が町中を駆け巡っている。頭上には上層を広げ

る白い大きな橋がいくつもゆったりとしたカーブをかけて伸びており、下層に涼しい陰や雨宿りののが可能な場所を提供している。現在の都には五層あり、一番上の、もっとも小さな面積を持つ層は丸ごと王宮の敷地となっており、そのすぐ下の層には伯爵や王族に近い身分が住んでいる。そのまま下に行くことに庶民に近づいていくのだ。エリオットの通う学校は第五層、一番下の層の南側に位置しており、彼の住む第三層東側からまあまあ近いと言っていい場所に位置している。

水路から伸びる、そこかしこに設けられている大小の丸いプールのような物は元々船着場として作られた物だ。ただ、そこでは誰でも涼む事ができ、暑い日には半分は遊泳所、もう半分を業務用として割られる事が多い。特に大きい物は周りに屋台、店や宿屋、さらには脱衣所などが立ち並んでいる事もあり、観光者に高い人気を誇っている。また、大抵の脱衣所は荷物を預けられたり湯浴みが出来たりするので、夏の季節にはすごい事になっている。

冬の季節には、小さい物は凍らせられスケートリンクになったり、暖かい場所でしか生きられない魔物の保護所にもなったりする。水路と船着場は範圍ごとにあらかじめ分けられている区画内の代表達が管理しており、水温も自由に換えられるからである。暖かくするために必要な金や道具は、半分は貴族達からの寄付で補えているが、もう半分は特別に税を増やして払っている。増税に文句を言っている住民は居るにはいるが、賛成派と比べるとかなり少数しかいないので黙殺されている。

保護所になっている船着場の傍には、彼らが食べても良い物と悪い物の情報が書かれている看板が立っている。以前立っていた看板には「魔物には餌をやらなくてください」と書かれていたが、短くやわらかいその白い毛並みとくりくりの黒目、そして鈴のような声

で甘えてくる姿がかわいらしく、大多数が与えてしまうので二十年ほど前に今のメッセージに変わった逸話を持っている。冬には回りの店に専用の餌が売られる事もあり、今では夏のプールに次ぐ観光名所にもなっている。

水は澄んでいると言ってもやはり飲み水には適しておらず、その確保には何十年前より工夫がされ続けている。昔は個人の家で沸かしたりしていたとエリオットの教科書には書いてあったが、彼が生まれる三年前あたりに現在の、浄水器が備え付けられている「井戸」形式になったとの事だ。「井戸」は区ごとに決まった数が割り当てられており、管理はその区に住んでいる者全員の仕事である。上に行けば行くほど個人で「井戸」を所有している確立が高く、エリオットの屋敷もその例に洩れずキッチンに一つ、庭に一つと計二つ所有している。

海上にある部分は島とは違い、水路や船着場の壁は無く海に住む生き物が悠々と泳いでいる。この海上部を一つにしているのは、アーチ型の橋や水の下でつながっている鉄骨、少々ばかり沈んでいる頑強な鎖である。また、水路は海そのものだけあって、水もしょっぱく「井戸」の浄水器も島の物より強力である。もちろん温度は変える事はできず、全てが自然のままにその形を保っている。

海上部には層という概念はなく、頭上にはまっ平らな空だけが広がっている。神殿やギルドなどの外部向け施設はすべてこの海上部の、もつとも二大陸に近い西側に立てられており、あまり金を使わうわけにはいかない者や冒険者などはそこに宿をとるのが通例である。それが故に海上部はかなり入り組んだ雑多な場所となっているが、逆にそれは数多のおかしな店や目を引く商品を引き付けている。そしてそれは、大陸にあるような大きな町ほど多くは無いが、水の都にも若い子達が遊べる場所が存在しているという事である。

そんな場所をエリオットとアリアーナは散歩していた。とくにエリオットは普段己の住家と学校の付近しかうろつかない事もあり、遮る物が何も無い青い空と乱雑な町並みなど、見るもの全てが新鮮な海上部に内心では飛び跳ねるほど興奮していた。アリアーナはそんな彼を淡く笑みながら時折見やり、同時にごった返している場所に付き物のトラブルなどに巻き込まれないよう周囲をさりげなく警戒していた。この西側は、本当に危ない北側方面ほどではないが、あまり身元がはっきりしていない者でも容易に入ってこれるため警戒はするに越した事は無い。

特にエリオットは能天気すぎる部分があり、「どうにもあぶなっかすぎてひやひやする」が彼を知る者達の総意である。ともすると自分たちの世界に入ってしまったいあまり外を見ないアリアーナとマコトでさえそう思うのだ、彼女らほど彼を良く知っている者はひやひや程度ではすまないだろうな、とアリアーナはよく思っている。例としては、今この瞬間にもこちらを見ている者達の存在だろうか。

軍や貴族の中にはアリアーナとマコトが色々な意味で気に食わない輩がいる。そして「親」にとつてもっとも効果的な脅しは子供を使った物である。そこまではよくある話であるし、警戒させたり護衛を一人か二人つけておけばなにも問題はない。だが彼女の息子は「警戒」が苦手らしく、どんなに言い聞かせてもたまたまに危ない行動を取ってしまう。ならば護衛を雇ったりすればいいのではないか、と言われた事もあるが、護衛をするはずだった者自身が誘拐犯だった事件もあり、もう二度と他人を中に入れない事に家族は決めていた。

それでも朝の内はまだ良かった。人懐っこいふわふわ灰色毛並み

の魔物と戯れたりちよつとした見世物に感動したり、生きてるような珍妙なオブリエに目を奪われたりと平和に歩き回り、アリアーナの中の命も喜んでいようだった。だが、昼過ぎあたりから雲行きが怪しくなってきたのだ。朝よりもこちらを見ているねつとりとした気配が増え、不穏な空気がまわり付いてくる。いくら二人だけで来たとはいえ警戒していた事もあり、アリアーナは小さな短剣しか装備していなかった。彼女は唯一持ってきたその位置を確かめ、は、と息を短く吐いた。

こんな事なら、剣を持ってくるんだつたな。

後悔なんて物は役に立ちやしない、と言ったのはだれだったか。アリアーナは思い出そうとしながら愛しい息子を傍に呼び寄せ、無邪気な顔に笑みを向けてから短剣に手をかけた。それでこちらを見ていた無粋な輩は気づかれたと悟ったのか、もう隠れようとせずこちらに向けて歩いてきていた。彼女がエリオットの頭を撫で、短剣を引き抜こうとした、その時。

「あれ？　もしかしてアリアちゃん？」

いささかここには不釣合いなその発言に、空気が止まった。

一瞬の間の後、ぱつと彼女が振り返ると同時に、エリオットが質問した。

「あれ、おっさん？　なんでここに？」

そこに立っていたのは彼女の同僚であり友人の、カドック・ギルテリウスだった。人目に紛れ込みやすい茶色の髪とレナル一族の証を持つ、彼女の上官の腹心である。腰につけられた帯には細い剣だ

けが下がっているが、ゆつたりとした服の下にはナイフや針、または毒など隠蔽形武器がごまんとつけられている事をアリアーナは知っていた。それと同時に、彼ともあるう者がなぜこんな所に居るのかと疑問を抱いた。

「お、ちびちゃんもいたのか。おっさんはねー、ちょっと大人のお買い物に来たんだけ？」

彼は飛びついてきたエリオットを軽々と抱き上げ、軽く回った後地面に下ろした。

「大人のお買い物？ なにそれ！」

「んー、大人になつたらおしえてあげない事もないかもね。」

「けちー。」

エリオットが頬を膨らませている。その年相応のかわいらしい仕草に軽く息をつき、アリアーナは手を離れた。相手がいくら多かろうと、周り全てが見方ではないこの状況では、武器を持った戦闘の専門家に勝てる訳が無い。色々と疑問は残っているが、今は忘れてしまう事に彼女は決めた。

「珍しいな、カドック。仕事はどうした？」

彼女は全身に入れていた力を抜きながら質問した。

「んー、抜けてきちゃった、みたいなの？」

「そうか」

もちろんサボリではない事をアリアーナは知っている。短い答えに感謝の意を含ませて、彼女は軽く会釈した。

「でも、子供をこんなところにつれてきちゃダメじゃないの。怖い怖ーい人攫いが居るかもよ？」

「う、悪かった…」

「大丈夫、私がいるもん！」

カドックが注意したら、何を勘違いしたのかエリオットが胸を張って答えた。

「なーにいつてんの、ちびちゃんがいるから心配なのよ？」

「ええー？」

「だってちびちゃん、何度言っても危なっかしい事ばっかするじゃん。」

「わざとじゃありませんー」

「だから性質が悪いって事を理解しようねえー」

「…」

エリオットは膨れてアリアーナに抱きついたが、カドックが謝罪をすると素直に向き直った。自分は大人だから許してやるとエリオットは言ったが、アリアーナには素直になりきれない可愛い子供に

しか見えなかった。

エリオットとカドックが遊んでいる公園の近くの喫茶店で、アリアーナはお茶を飲んでいた。彼女が席に忘れ去られていた雑誌を読んでいると、いつの間におやつ時になったのか二人が欠食児童のように腹が空いたと訴えてきたので、アリアーナは苦笑いしながら軽食をとってやった。ついでなのでカドックの分も払ってやる、と彼女が言ったら、カドックは手を合わせながら感謝した。

男手があるのをいい事に、アリアーナは彼らを一服させた後、ショッピングに連れ出した。彼女の夫は嫌がって逃げるし、息子は幼すぎるのでこの所ストレスの発散が出来ていなかったのだ。おごった礼とばかりにつれまわし、ようやく家にたどり着いた時には日が完全に暮れていた。カドックをリビングに案内し、彼女はパーティーの準備の手伝いをするべく夫を探しに向かった。

フォローをする事に関しては、自分より上手な息子に同僚を任せて。この家は比較的慎ましやかではあるが、それでも大広間は名前に恥じず大きい。横に長く、天井は高く、縦長の窓がいくつもならんでいる。玄関方面の扉の真反対には庭に続く大きなガラス張りの扉があり、今日は籠った熱気を逃がすため軽く開けられているのがエリオットには良く見えた。いつもは簡素なこの部屋だが、寒い日の祭りという事もあり、今日は赤や橙など見えていて高揚するような色で飾り付けられている。もちろん呼ばれた客達も、謹みや気品を失わない程度に派手なドレスや礼服を着てきている。その中で、たった一人、自分の日の色である真っ青なスーツを着ているエリオットは、とてもよく目立っていた。

エリオットが入ると同時に、拍手が鳴り響いた。そのまま彼は、入り口から左手に設立された壇上に向かった。六歳という小等部に移る年齢になったのもあり、今回からは彼自身が挨拶をしなければならぬのだ。エリオットも「彼女」もこんな大勢の前でスピーチをするのは始めてであり、緊張しすぎて最後のほうは何を言っていたかすら覚えていなかった。ただ、彼の母の客が言ってきた内容を信じると、あまり酷い事は言っていないかったようなので、二人して内心胸をなでおろした。

「エリー、おつかれ。」

ダートイーブロンドの髪とヘーゼルの目をした、ほわほわしてかわいらしい少女がエリオットに話しかけてきた。彼女の着ているドレスは、周りに比べれば地味としか言いようが無いが、明るい緑色のそれは彼女に良く似合っていた。名はメラニー、彼が通っているホノーリア一貫校のクラスメイトである。ホノーリア一貫校は、このあたりで唯一実力のある者だけをとる進学校であり、保育園から大学までそのまま上がれるエスカレーター形式を取っている。ホノーリア、は設立者が目に入れても痛くないほどに可愛がっていた娘の名前だと彼は聞いた事があった。

「まったくだ：ああでも、ようやくご飯が食えるよー。」

「あ、じゃあ一緒に取りに行こうよ。お代わり取りに行こうかなって思ってたところだし。」

「おう、お勧めなーに？」

くすくす笑いあいながら彼らは食事が乗っているテーブルのほうに歩いていった。

「えっとねー、やっぱりローストチキンは美味しかったよ。あとね、ちっちゃなパンのくぼみにほうれん草のペーストみたいなのが入ってるのとかー、あ、あと冬野菜のバター炒めがすごく美味しかった！」

「なるほどなるほど。 んー、目移りしちゃうな！」

エリオットは皿を取って見渡した。 所狭しと大皿が並べられており、彼は何を取るうかあれこれ考えた。

「でしょー、だから私ね、全部ちよつとづつとることにしたの。」

「あ、それいいね、いただき。」

「まねっこー」

「きこえなーいもーん」

彼が笑いかけると、彼女も本当に嬉しそうに微笑む。 一瞬和やかな空気が彼らを取り囲んだが。

「なんだ、こんな所に居たのか。 まったくお前は本当に地味だな。」

「

「ん？」

エリオットが振り返った先に居たのは、さらさらの明るい茶髪に茶色の目をした少年、デミトリウス「ヴェントルス」ヴィスフェルト、ヴィスフェルト家の長男で次期当主だった。

「あれ、デミちゃんじゃないか。来てくれたのかい。」

「せめてデミックスにしろと何度言えば分かるんだ……」

エリオットが笑いながら拒否をすると、彼はため息をついて話題をやめた。いつも喧嘩腰だが、今日は軽い嫌味だけで済ますつもりの方である。彼は認めないであろうが、エリオットとの仲は良いほうである。

二人は選択授業に音楽を選んだ縁で知り合い、高いプライドが故に孤立していた彼で遊ぶのが楽しくなったエリオットが、引つ付く形で友達になった経歴がある。少し尊大な物言いではあるが、彼の驕の甲斐あつてか最近は何人を気遣うようになってきた所もあるのだ、エリオットは満足していた。特に、エリオット自身のような「馬鹿」に対する反応を覚えさせたのは誇つてもいい事だと彼は勝手に思っていた。姉達と母親からおもちゃ代わりに扱われすぎて己の考えを言えない所はあるが、それも現在進行形で教えているので問題は無いと彼は信じている。

「んで、フランさんはいまいずこ？」

「お呼びかしら、主賓様？」

うわさをすれば影、輝くような赤毛と意志の強い青の目をした少女がすつとデミックスの横に滑り出た。

そのふわりとしたドレスは、彼女の髪に合うように白に近い淡い物から血のような濃い赤を取り混ぜた、職人の一品と言っても過言ではない美しい作品だった。流行に添う所か斜め上に行っているが、とても似合っている。彼女とはクラスも年齢も違うが、許嫁だとデミックスに紹介され現在に至る。性格は良い意味でまっすぐで非常に賢く、いかなる状況でもどっしりと構えられる度胸もあるが、何より気を使うのが非常に上手くデミックスにはちよつどいいタイプだと彼らを知っている者の殆どが思うだろう。母親と姉達は己に従順なタイプが欲しかったようだが、当主と父親が黙らせたそう。これでもし女性陣に従順であつたら彼の逃げ場がどこにもなくなるので、彼らの判断は適当だったと言えよう。現に彼はようやく「男」としてのまともな責任感や思考回路を覚え始めている。

彼女の名前はフランベル「ルナ」ロベルティーネ。名前に「月」が入っている事から分かる通り、代々月神の神官を務めて来た一族である。もちろん彼女も月神に忠誠を捧げている。月神は綺麗で賢い者が好きなので、一族の歴史の中でもトップを誇れるほどに美しいフランベルは、高位の「お気に入り」である。そしてヒトは認められるとさらに認められなくなるもので、いまやフランベルはたつた9歳で中等部が上がっていた。エリオットの卓越した知識も彼女は、まるで昔から知っていたかのように吸収する。

「あ、フランさん。来てくださって嬉しいです。」

一応年上かつ家柄が上なので敬語を使う。敬いの印に一礼を送った。

「こんばんわ、エリオットさん。ご機嫌いかが？」

気高い綺麗な笑顔がそれに答えた。月の名にふさわしく、彼女はいつも高潔であらんとしている。九つでこれほど美しいのだ、将来が非常に楽しみな美少女である。

「とても良いですよ、ありがとうございます。あなたのご機嫌はいかがですか？」

「まあ悪くはないわ。食事も美味しいし、今宵は良い月が出ているもの。」

悪くはないと良いながら、とても楽しそうに笑っている。

「ええ、確かに良い満月ですね。雲ひとつなく、綺麗にまん丸です。」

二人して窓から見える、銀色の塊を見上げる。「彼女」が見た事もないほどの暗闇に、無数の星が月を彩るように瞬いていた。

遠くの演奏と近くの天然同士の会話を聞きながら、明日もこの様な日でありますようにとエリオットは不特定の誰かに祈りを捧げた。

そんなセンチメンタルな思考は、一般客が帰り、宴会が始まると同時に吹き飛んだ。酒は出るわ、煩い歌は聞こえてくるわで散々だったとエリオットは今でも思い出す。夜も遅くなり、やとわれメイド達と共に希望する客に部屋をあてがい、大広間に戻ってみると死屍累々として形容の仕様がなない惨状が広がっていた。エリオットは目で訴えてくるメイド達に今日は帰るように指示を出し、介抱してやる事を諦め部屋に戻って寝た。

3・喧騒と、人々と。(後)(後書き)

(、(今週マジ鬼畜だった
(、(では、皆様に良い日が訪れますよう！

4・本編では説明できない設定コーナー(1)

本編では説明できない設定コーナー：日にち編

一週間は光、火、風、変り、水、土、闇、無の八日間です。一週間が四回くると一月回ったとなります。

一年はだいたい春、夏、秋、冬と続き、それぞれ四月づつ割り当てられています。基本的に一日増えた減ったはありませんが、時間も管理している「運命」の神様からお達しがあった際はその限りではありません。その場合には、町の広場など目立ちやすい場所に神官がいたり張り紙が張られます。

通常の週休みは好きな日を労働契約時に選びます。休みの日を全員そろわせて「定休日」としている所もありますが、シフトっぽく調整してフル稼働している所もあります。こういう部分は基本的に権利者の自由です。

学校や病院など、国立の施設は週休二日を基本とし、無の日と闇の日をそれにわりあてています。エリオットの誕生日は冬の二月、三週目の水の日です。諸々の事情により、三週目の変りの日から四週目の水の日まで学校を休む事になっています。成績が常にトップなので、必要以上の宿題を出されてはいません。

本編では説明できない設定コーナー：神々の事情編

上位から下位までいっぱいいます。運命、火や水などの属性各種、食物など、わかりやすい+祈りをささげられやすい属性の神々が上位種となり、強い力を持っています。元々は時間の神様もいたのですけど、性格が合わずずっと昔に神をやめてしまいました。時間があやふやだと不都合しかでないのも、もともと几帳面な性格の運命さんが兼業する事になったのです。他の神様方も後釜を探してはいるのだけど、大きい力に耐えうる魂っていうのはそうそう見つかるものではないので今でもダブル運営中です。運命さんは人間大好きな方なので、辛くてもがんばっています。そのおかげで捧げられる祈りの量が増えたので、まだマシな方だと常に言っています。

ちなみに一人を正式に信仰すると、他の神に祈りを捧げた際に不興を買ってしまいます。食物さんなど感謝しないほうが可笑しい、という場合に関しては、「しょうがない」って事でその限りではありませんが、祈り=命の糧と言っても過言ではないので皆さん必死なのです。

不興を買ったら、非常に機嫌が悪くなり力を貸してもらえなくなります。だから、理由を話して納得してもらうか、供物や贈り物を用意して機嫌をとるしかなくなります。信仰すると魂に所有印がつけられ、じゃあ他の方に拾ってもらうからいいよ、も出来なくなるからです。ただし、自分の「お気に入り」がそんな事をすれば機嫌が悪くなるだけじゃすみません。お気に入り=目をかけてやっている、ですから他人に擦り寄るその行為は裏切りと見る方々が非常に多いのです。理由があるならまだちよつとしたお仕置きで許してもらえますが、悪ければそのまま監禁してからの洗脳になります。皆さん結構過激です。

もちろんお気に入りだが他神に祈りを捧げて怒らない方々も居ます。食物さんはその筆頭です。他には、利用できる物は全部使えの畑さんや、可愛がつて貰えれば大満足な太陽さん、そしてなぜか破壊さんがこれに当たります。破壊さんの理由はお気に入りの方々にさえ分かっていません。

また、神と人間の間にはデイクエクスという生き物もいます。彼ら（または彼女ら）は生き物の罪や美德（勇気や怠惰など）が具現化した存在であり、自分の持ち特性を強く発揮する生き物に対して力を与えたり眷族に変えたりします。始祖に近ければ近いほど力が強くなります。

神々と違って祈りで生きている訳ではなく、一応は生き物なので普通の生き方をしています。ただし、同じ属性同士はたとえ犬と人間であつたとしても会話が出来ます。

他には神無と呼ばれる、神殺しの一族が居ます。成人すると、弱くても下級では到底叶わないほどの力を持つので、神々サイドからは常に要監視対象になっています。デイクエクスとの関係は、悪くはないですが良くもない、と言った所です。特徴は銀の髪に銀の瞳ですが、簡単に隠蔽できるのであまり意味はありません。

数は低く、山奥など見つかりにくい場所が彼らの住処です。基本的に他人に関する興味が薄く、相手から手を出されなければなにもしません。たまにフレンドリーな固体もいますが。

5 ・それは、呪いかそれとも祝福か (前)

「…やい」

「…リー様」

「起きて下さい、エリー様」

「エリー様？」

寝ている体が揺さぶられている。

「まだ寝てるんですか？」

「ねえ？」

「自堕落にもほどがあると思いませんか？」

「エリー様？」

「…サラ、さん？」

久しぶりに嫌な夢を見たと思いながらエリオット「T」シユヴェデールは目を覚ました。あの水底でまどろむ直前まで見ていた、悪意に満ちた瞳の数々。己の努力を無に帰す、嘲笑する声。本物すぎたその夢の記憶は、寝起きの彼の頭を混乱させた。まだあそこに居なければならぬのかと、叫びだす直前で思いとどまれたのは、彼女の手の温もりのおかげか。こここの所、思い出してもあまり鮮明ではなかったのに、今日の夢はまるで今が嘘だといわんばか

りに、彼の記憶を穿り返した。

「…エリー様？」

「ん、なあに？」

さつといつも以上に嬉しそうな、幸せそうな顔を作る。彼はそれでおそらくいつも通りの顔だろうと信じているから。

「…いえ、なんでもありません」

「そう」

彼がふわりと笑い、ベッドから降りると、サラが服を手際よく着替えさせた。彼女の顔に前夜の疲れや深酒の名残はない。

けだるげな空気をわずらわしく思い、エリオットは頭を振って窓を開けにいった。カーテンを除けると所々の雲、澄み切った空と鮮明な景色が見える。なだれ込んできた、身震いするほどの冷気が部屋の色をざあつと塗り替えていった。鳥肌が立つ。昨日よりは格段に冷え込んではいるが、今日も元気に快晴である。

自分にもわからない何かを笑顔の裏で叫び求めても、差しのべられる手は一つもなく。彼はそのまま部屋を出て階下の洗面所に向かった。

その後ろには、サラが静かに付き従っていた。

食堂では宿泊客達が思い思いに過ごしていた。今日の朝食はビュッフェ形式らしく、玄関方面の一番大きな入り口の両側に、料理がたくさん乗せられたテーブルが置いてあった。客の中で昨夜おとなしく部屋に案内されてくれた組は、顔色も良く出された朝食を元気に食べていたが、大広間の床で寝ていたほうは体の節々が痛むらしく時折顔を顰めていた。それを見てエリオットは少し気分が良くなった。意地が悪いと自覚はしているが、おかしく見えたのだ。そのおかげで今日も笑顔で過ごせそうなので、感謝するべきかもしれないな、と呟いた。

今日で契約が終わる仮メイドの大半は大広間の片づけをしているらしく、ここには十人ほどしかいない。そしてその中にはカドックが目をつけていた子はいないらしく、隣のギルテリウス参報長官からの視線に気づきませずきよきよと見渡していた。

目が怖いです長官殿、とエリオットは思ったが、口に出す勇氣もなまま挨拶だけをして通り過ぎた。そもそも普段無表情なギルテリウス長官が常時笑みを溢している時点で、普通は気づきそうなものなのだがな、と独り言ちた。ギルテリウス長官が怒っている時の目の冷たさは、それだけで人を殺せそうなほどに鋭く、人を凍てつかせる。

父母と客人たちに挨拶を送り、彼は朝食を盛りにテーブルに向かった。オムレツにサラダやソーセージなどを適当に付け足して、エリオットはメラニーの隣に腰を下ろした。

「はよーっす」

「おはよー。」

「お早う。」

「お早うございます皆さん。何か不都合はありませんでしたか？」
エリオットは地位が入り混じってる場合、敬語で通す事にしている。
一番簡単かつ機嫌を損ねにくいからだ。

「やー、美味いわ快適だわで文句なしだぜ。　ってかお前の敬語ほんと気持ち悪いよなー？」
デミトリウス「V」ヴィスフェルトが朝っぱらから悪態をついてくる。

「ぶんなぐるぞー」

「きゃー」

エリオットがこぶしを構えると、デミトリウスが笑いながら頭を抱える。　ここまでがお約束なので女性陣は止めもしない。

「私も不満はないわ。　むしろここまで快適だと貴方と婚約しなおしたいくらいね。」

「えっ？」

「ありがとうございます、その節はぜひご連絡ください。」

「えっ」

もちろん本気でない事は、デミトリウス以外の全員がわかっている。

「フランベル…？」

さすがのような目でデミトリウスは彼女を見る。それに笑顔のみで答えながら、彼女は優雅に朝食を再開した。

男爵家なのに神官家と婚約できている時点で気づくべきだとは思いますが、鈍い彼には酷だろうかとエリオットは思った。

というのも、神々が実在しているこの世界では、神官の一族はヘタをする和王族より発言権が強い場合が多々あるのだ。この国ではそれほどでもないが、貴族の階級で一番上である公爵家よりも高い特別な地位を持っている。そしてそれに見合った力や権利なども通常ならばありえないほどに、地位の差が付きすぎた婚約。それを可能にしたのも神官家という地位の特異性ゆえではあるが。

うなだれて再び食べ始めた彼を生暖かい目で見やり、エリオットは暖かいうちに食べ終わるべくフォークを手に取ったのだった。

「ふう、」

客人達の見送りも終わり、ベッドに倒れこんだエリオットはため息をついた。そのまま靴を脱ぎ、もぞもぞとさながら芋虫のように真ん中に移動する。煩い友達との会話を思い出し、自然と彼の口に笑みが浮かんだ。やはり落ち込んだ時は誰かと共に居るに限る、

と思いつつつぶせになる。窓はすでに閉めてあるので、暖かくとても快適だ。一週間も休みがあるので、今日ぐらいはのんびりとこのまま二度寝に突入でもするかと考えた時、すっと良い香りが漂ってきた。

「ん？」

食べ物の匂いでもなく、今まで嗅いだ事もない匂い。一瞬で消え去ったその芳香は、まるで氷のように鋭く冷たく、彼の体中に広がった。

エリオットは体を起こし、部屋を見渡した。しかし窓はきっちり閉まっており、ドアの外にも人の気配はない。そもそも歩いてくる足音さえなかったのだ。居たら怖い。

気のせいだろう、と彼は思い再び寝転んだ。食べている最中に変えてくれたのだろう、シーツや布団は新しい物になっていた。太陽の匂いがするベッドに沈み込み、目を閉じた。しばらく待っていると、意識が勝手に彷徨い始めたのを皮切りに、どんどん眠気が襲ってきた。

下に、下に。

沈んでいるような感覚。

しかしあそこの様に暖かいわけではなく。

だけれど今朝の夢のように、奥底まで引き裂くような痛みはない。
ひんやりと心地よい冷たさが続いている。

何も考えられない。

ゆっくり、ゆっくりと仄かに明るい中を沈んでゆく。

底はまだ見えない。

あの人魚が居ない事からして、ここはあそこではないのだろう。
エリオットはそう結論付けた。

口からごぼ、と一つ泡がもれた。

息苦しくはない。

彼にとってここはとても安らげる場所だった。

まだまだ沈む。

…ようやく何かが見えてきた。 何かが淡く光っている。

最初はただの点だったが、近づくにつれて丸、さらに近づくると円柱形の柱だと言う事がわかった。 下のほうは遠くで見えず、全て白銀色の金属とステンドグラスで出来ているようだ。 横のほうは見えないが、平たくなっているところの右側にはしなやかな一輪の花が描かれていた。 そのやわらかく広がった花弁や、下部から伸び

る棘付きの華奢な茎とぎざぎざした葉は全て淡い水色で出来ており、まるでアクアマリンで作られた薔薇のようだった。中央には時計があり、左上には丸に囲まれた下弦の月、その下にも囲まれた剣と盾、そして一番下にも同じように瞳が描かれていた。背景は暗い青色で、ある程度は遠くからでも良く見えた。

沈んでいくと、それがかなり大きい物だと言うことがわかった。花びらの一枚一枚が彼の顔よりでかい。真ん中の時計の半径なんて身長より長いだろう。

とん、とエリオットはその時計の上に降り立った。見た目は薄いガラスなので壊れる事を予測していたが、思ったよりも硬いらしい。しかし何より彼が驚いたのは、降り立った瞬間に香ってきた、さっきのあの芳香だった。ただ、今回は一瞬で消えてなくなるわけではなく、ゆらりゆらりとむせ返るほどの濃さであたりを凍てつかせていた。

しかしどこにも花の姿はない。

あるとすれば、右のほうに描かれている水色の花ぐらいか。

彼は辺りを見回し、左下の目の方に行った。それだけがどこか異質な感じがしたからだ。近くまでたどり着き、覗き込む。色は黒だった。何も起こらないので、別の所も回ってみる。時計の針がなかった事を除くと、何もおかしい所はなかった。ふと、柱の中に何か居る気がした。

透明な部分を探した。時計の中心に大きいのを見つけ、覗き込む。上のほうは明るかったが、外側とは違い、下のほうは暗くてまったく見えない。目を凝らしてみても、そこに何かがあるという事

がわかるだけで、何かも、誰かすらもわからない。　もっとよく見ようと顔を近づけ、額が触れた瞬間。

今まで立っていた場所が割れた。

柱の横はひび一つ入っていないが、平らな部分のステンドガラスは無数の欠片に割れ、辺りを虹色に染め上げた。

きやらきやらと破片は舞い踊り、支えるものを失った彼は筒の中に沈んでいくしかなかった。　暗闇に近づくごとに気温は冷え、息が苦しくなっていく。　もがいても体は上昇せず、なすすべもなく下へ下へと進んでいった。

自分の手を見る事も難しくなってきた時、下の何かが気づいたかのように上を見た。

それはしばし驚いたように彼を見た後、ゆるり、と起き上がり浮上した。　その事は気を失いかけているエリオットにはほとんど見えではいなかったが、それでも受け止められた事は感じた。　そのまま彼の意識は黒に塗りつぶされた。

そこで彼は目を覚ました。　そして指一本動かさぬまま、窓やクローゼット、果ては炎が入っていた筈の暖炉までなど、全てという全てが氷の層と花で埋め尽くされている自分の部屋を見た。

5 それは、呪いかそれとも祝福か (前) (後書き)

タイトルが難産でした

6 ・それは、呪いかそれとも祝福か (後)

しばらくの間、エリオットはただぼーっと現実を見ていた。 見ている間に、夢で見たその花はまるで生きているかのようにふわふわゆれている事や、氷の層だと思つた物は実は細かく張り巡らされたツタだと言う事が分かってきた。 でこぼこした部分は張り巡らされてあるものより大きなツタであり、彼の体に絡み付き行動を阻害している大小の脈動している何かはそれらと思つて間違いはなさそうだった。 ツタには花の茎と同じく棘が生えている事が見て取れたが、彼の体には一つも食い込んではいないらしく痛みは欠片も感じなかった。

そうか、これが発現とやらか

思い至ると同時にエリオットはため息をついた。

どうやら私は何かを失敗したらしい。

失敗していなければこんな動けない目にはあつていないだろうと呆れ、なんとかして抜け出す方法がないものかと唯一動き回れる目で辺りを見回すも、もちろん何も無いわけで。

…よし、待とう。

今が何時なのかは知らないが、日は高い。 そもそも朝食を取つたのは十一時。 ブランチの時間だ。 目覚めは少々悪いし軽い頭痛もするが、たった一時間二時間寝ていたという事はないだろう。

そこから逆算すれば、とうに真昼は過ぎている事がわかる。 さ

らに言つと、三時には何があるつとおやつが出てくる。つまりはその時間になるまで暇を潰せば、誰かしらが発見し何とかしてくれらるだろう。彼はそう結論付け、現実逆らうのをやめて力を抜いた。つい昨日あきらめるといふ気の持ち方を思い出したばかりである。練習するのも悪くはない。そう思つて。

…そう思つて。いた。

トイレに行きたくなるまでは。

いかにあきらめの精神を手に入れたといえど。 たつた六歳といえど。人間としての尊厳や誇りを捨てる訳にも行かないわけで。今に助けが来るさ、と思いつけてどれくらいたつたか、そろそろ彼にも限界が迫つてきていた。悪い事に、頭の痛みも増してきてい

前世でもこれほどのピンチには陥つた事は無いなと脈絡のない事を思つてみても、三大欲求の一つはまったくもつてどこかに行つてくれるそぶりも見せてくれず。今の状況と、困まれて悪意のこもつた声で罵倒されつつける状況のどちらかを選べといわれたら、エリオットは迷わず後者を選ぶ。罵倒ならば脳内で言葉攻めと変換する事が可能だし、少々受け取り方を変えれば喜ぶ事ができるからだ。…もちろん彼はこの緊縛放置プレイのような状況も嫌いではないが、さすがにお漏らしは無理であり、しょうがないので助けを呼ぶ事にした。

しかし、いくらありつたけの高い声でだれか居ないかと叫んでも、何一つとして音は聞こえてこなかった。

さらに言つと、いつもは何かしら階下から聞こえてきている生活音

すらない事にエリオットは気づいた。

耳鳴りがするほどの無音という訳ではなく、花弁やツタがすれるしやらしゃらという音はずっと聞こえてはいるが、本来あるべき音はすべてなくなっていた。

彼がこのまま開放するしかないのかと絶望しかけたその時、かすかに耳にかりかりと壁を引っかいてるような音が届いた。

このさいなんでもいい、この状況から助けてくれるなら。

そう思い、彼はそこに向かって声をかけた。

しかしなんの声も答えなかった。頭痛はどんどん酷くなっていく。

ただ、時間がたつにつれてその音は大きくなっていき、それに伴い音源の付近でのみほんの少しではあるが物音や複数の声が聞こえるようになり始めた。

音はどんどん大きくなっていき、やがて壁に小さな穴が開いた。

ただ、ツタのせいで氷越しに穴を見る羽目になったが。

「エリー！ 聞こえるかい！」

真っ先に聞こえてきたのは珍しく焦っている父の声だった。しかしそれは穴が開いているにもかかわらず、非常に小さく遠く、ぼやけて聞こえた。

「父さん？」

「聞こえるね！ 無事かい?!」

しかし彼には普通に聞こえているらしく、エリオットが驚いて漏らした咳きにもしっかり反応した。

「父さん、そろそろトイレがやばいです…」

「…そうか、無事なんだね！ 専門家の皆さんに来てもらったから、すぐに出してもらえるよ！ なにも心配しなくていいからね！」

気が抜けたようにそういうと再び穴を広げる作業に入って貰ったのだろう、またがり音が聞こえるようになった。彼にとっては半分以上本気なのだが、これで急かすすぎて怪我をされる確立が減ったはずなので、よしとした。しかし壁を壊す専門家なんて始めて聞いた。普段の仕事内容を後で聞いてみようというエリオットは固く心に誓った。

しばらく見ていると、子供なら通れるぐらいまで広がった。ツタのせいで輪郭などしか見えなかったが、それでも人がどこにいるかぐらいは見て取れた。母が喋ってこないのは仕事に行っているからだろう。

広がっている三人の後ろにさらに三人ほど見えた。その三人が何かを喋っている事はわかるが、内容はわからない。穴が広がったとしても、ツタはどうするのだろうか、とエリオットはふと思った。生きているようだが、炎で焼いたり切ったり出来るのだろうか。

切られてくれるのならそれが一番楽だが、そうでない場合は最悪助けられてる最中に限界が来る可能性がある。そうなったら彼は一生穴に入って暮らすしかないと決意した。いくら女より尿意に対して我慢強いといえど、男にだって限界はある。

さらに痛みが増した。今はもうノミを叩きつけられている石の気分が分かるぐらいに強まっている。

ついに穴が大人でも入れるぐらいにあいた。しかしツタは硬く絡み合い、まるで魔女の茨のように進入を拒んだ。専門家とやらががつつ何かを叩きつけ壊そうとしたが、傷一つ付かないらしく外の声が非情に焦った物に変わった。

まるで、茨姫のようだ。

エリオットはふとそんな事を思った。

1000年もの長い間、一人ぼっちで閉じ込められていた訳ではないけれど。鎖で閉じ込められているのはおんなじだ。

おあつらえむきに、ツタも花も茨みたいで。一瞬自分の状況も痛みも忘れて軽く笑った。

…思えば、これが妥当な所存なのかもしれない。

笑うのをやめ、彼は考え込んだ。そうするといっそう痛みを感じた。視界が軽くぼやけた。

顔では笑い、ただただ、そこに居、るだけ…

どんどん痛みは酷くなっていく。

でも、茨姫は、現実、に立ち、向かった、けど…私、はみんな、を、騙し、てば、かり、で…

割れるほどの痛み。

う、そ、つき、は、みんな、きら、い、な、の、に…

思考さえもままならなくなってきた。

あ、れ…わた、し、い、ない、ほ、うが…いいん、じゃ…な…

穴からの音が遠くなり、視界がかすむ。部屋の寒さは強くなり、舞い狂っている芳香はいつそう密度を増し、ツタはするりと穴やドアの隙間を使い外にも侵食をはじめていた。彼の心は受けつづけた悪意に満たされ、それは静かにそこに在る幸せを食らい尽くしていった。心の本質は闇だ、とは誰がいった言葉だったか。思い出せはしないが、今の彼にはそれは真実に思えた。

彼は目を閉じた。

しやらしやら、しやらしやら、しやらしやら

鈴の音の様な合唱しか聞こえなくなった。

しやらしやら、しやらしやら、しやらしやら

外から彼を呼ぶ、父と友の声ももう彼の耳には届かなくなった。

深みへ潜るほどに痛みは引いていったが、感覚も無くなっていった。

最後に残っていたのは思考と聴覚のみだった。

あの、魚？の忠こく、きいていればよかったかな。そうすれば、だれも傷つかなかったかもしれないのに。

…わたしのせいで、またみんなふこうになつて。

前にもこんな事があつた事を彼は思い出した。よかれと思つて、黙つていた真実。伝えなかつた事で責められ虐められた記憶。それより辛かつたのは、友と思つていた者を悲しませてしまった。自分のする事はいつも悪い方向にしか行かない。

今回も悪い方向にしか向かつてない。これからもそれは変わる事はないだろう。そう結論付け、せめてもの償いとばかりに、ツタを操り胸の内を脈動しているそれを止めようとしたその時。

やめる。

声が聞こえた。一段と低い、自分の物ではない、しかし自分の中から聞こえる声。ツタは動かなくなった。

だれ

言う事を聞かないそれに、彼は少し不満を覚えた。

誰かなぞ、今は関係がない。だが、お前が死ねば私も死ぬ。それは困る。

やだ

何故

つかれた

困る

知らない

知っていようがなんだろうが、死ぬのは許さん。

なんで

お前が必要だからだ。

ひつよう？

ああ、お前じゃないとダメなんだ。

なんで

…話せん。　だがお前以外では無理なんだ。

でてって

断る。　お前は手放すには惜しすぎる。

は？

あー…簡単に言うと、お前は非常に精神的に強い。強くないと私が住んでもすぐに壊れてしまう。そして私は隠れ蓑を必要としている。故に、私のためにこれからも生きてもらわないと困る。分かったか？

…きせいちゅうなんて知らない

…このような甚だしい侮辱をされたのは初めてだな。しかし許してやる。私の寛大な慈悲の心に感謝しろ。

やだ

…まあ、この話は追々していくとしよう。それより外に目を向ける。

なんで

お前を必要としている声が聞こえないのか？

でも、うそつきだつてばれたらいらないうつてされる

嘘？

わらいながらだれもしんようしてませんよつてことがばれたら

お前はただ怯えて閉じこもっていただけだろう。それは嘘とは呼ばないぞ。

…こわがってなんて

そもそも私は断片的にしか見れていないが、お前の身内はそこまですで非情ではない。

なんでそんなことわかるの

…お前はもう少し人を見る目を養ったほうがいい。前世で悪意に

触れすぎたのはわかるが、信頼するべき者まで遠ざけていると、体力、魔力が付きかけてるなどのほんの小さな理由でこんな事になる。

え、なんでわたしのきおく

いいからさつさと起きろ。心身共に弱っているから私に影響されるんだ。お前を求めている者達の声を聞け。そうしないと私も引っ込めない。

ひっこむ？

本来ならばこの様に話などしない。宿主に被害が来る可能性があるからな。

なんで

これこそ詳しい事は話せないが…少しばかり、追われてるのだ。ああ、もちろん危害は絶対に加えないし、加えさせない。微々たる物だが加護もくれてやる。茨も好きに使ってくれて構わない。ただ、お前がどうしても必要だという事は分かって欲しい。

いたイのはヤだ

ああ、私も嫌だ。だから、忘れれば何も心配する必要はない。私の事など気にせず、お前はただ、好きなように生きていけばいい。お前にとってのデメリットは何一つとしてないから、放っておいて、忘れてくれればそれでいい。本当に隠れさせてくれるだけがいい。それだけでいいんだ。たった、それだけで。…だから、頼む。まだ、私は。

…生きて、いたい。

ぼそりと呟かれたその言葉は、今まで聞いたどの言葉よりもずっと強く叫んでいた。それは微かではあったが、確かにぼちゃんとエリオットの心に一滴の水をたらし、それが作った波紋は消える事無くどこまでも広がっていった。

彼がその言葉に感化されたのは、その願いが自分の願いと同じものであったためか。記憶の底から蘇ったのは、遠い遠い記憶。もうおぼろげではあるが、幼い頃に感じた、自分の頭を撫でる優しい大きな手。自分を認めてくれる、喜びに満ちた声。抱き上げてくれた時の腕の感触と体温。喧嘩しても、怒られても、かならず仲直りが出来ていた、絶対的な庇護を貰える場所。そして自分を見て、自分と共に笑ってくれる、四つの瞳。

ずっと忘れていた、優しい光。

そして今も貰えている、温もりの暖かさ。

己の中で叫んでいた声の意味を、彼はようやく思い出した。そしてそれは、そこで涙も流さずに泣いている誰かの叫びでもあると彼は理解した。

…ねえ

なんだ

あれはキミのちからなの

そうだ。お前が茨を使えるようになったのは、私に取り付いた副作用みたいなものだ。…本当は氷そのものなのだが、生身に入ったせいで歪んだらしい。

なんで私なの

元々お前は魔力が無かったからな、普通の子より力を馴染ませ易かったのだ。

なかったの

なかった。ついでに言うと、外から貰うにしても、器が小さすぎて最悪死んで居ただろうな。

なにそれ怖い

かなり神経を使う作業だったぞ？　ここまで広げてやった私に感謝するんだな。

ありがとう

…いきなり謙虚になられると気持ち悪いな。まあいい、通常の魔術と比べると不便なほうではあるが、ないよりはマシだろう？

ん…つまり、相ご異存という事でいいのね

そつごいぞん？

んと、お互いがお互いを必要としてるってこと。

なるほど。その通りだな。

…ねえ

ん？

また、お話できる？

…ああ、お前が望むなら、可能だが…

じゃ、またしようね。

…ふん、まあ良からう。どうせ寝るしかないし、付き合ってやるうではないか。ありがたく思え。

別に、テストの時とか便利そうだし。

…手伝わんぞ。

えー

元気になったと思った途端に憎まれ口か。カラスかお前は。

鳴き真似上手いよ！

…まあ、いい。子供に怒ってもしょうがないものな。そう、
しょうがない。…ああ、もう一つ。

？

話す時は人気の無い所でやってくれ、振る舞いを見咎められたら
見つかる可能性が高くなる。

ん

よろしい。今回は私が茨を引っ込めておいてやる。…そう
いえば、トイレはもういいのか？

！

会話から目を覚ました彼は、ツタが無くなり飛び込んできた父とサ
ラに構う余裕も無く、一目散に廊下の奥に走っていった。しかし
あれほど彼を痛めつけた頭痛はきれいさっぱりと消え去っていた。

6 ・それは、呪いかそれとも祝福か (後) (後書き)

祝福か呪いかは、次回で分かります。 たぶん。(、、)

会話の展開、速すぎますかね…あ、シリアスは大抵この程度です。
生き死に展開は無いと信じてます。

執筆状況はTwitterに投稿してるんですけど、いいですねあれ、なんか戒めつぱくて。

7・星の瞬き、炎の揺らめきと緩やかな時間。

【閑話】

『突然ですが、お二人とも。』

「はい。」

ん？

『私、このたび、そこにいらつしやる彼への居候という呼び名が嫌になりました。なので、これから第一回 名前のない人に名づけ大会！を開催しようと思います。』

いきなり喋り始めたと思ったら、何を言い出すんだお前は。

「え、いつもこうだけど。…中から見てたんじゃないの？」

立ち聞きする趣味は無いからな。借りていたのは視界だけ、それも時々だ。

「あ、そうなんだ。」

『ねー、ちょっと聞いているの？』

「聞いているよー。でもなんで？」

『なんかいや。』

は？

『居候ってなんかいや。 もっと言ってて楽しい名前にしたい。』

訳がわからないのだが…

「さすが楓さんだ。」

それでいいのかお前は。

「もう諦めた。」

おい、六歳にここまで言われてるぞ。 恥ずかしくないのか？

『こんなおばさんと呼ばれる年まで育ったらもう無理なもの。 で、もう候補は決めてあるのね。』

「ふーん？」

『とりあえず、氷関連にしてみました。 名は体を現すって言うしね。』

…まあ、聞くだけなら聞いてやろう。

『まずは、劇「冬物語」のヒロイン、シチリア王の娘の【行方の知れぬ者】パルディータ。』

女の名前ではないか、却下だ。

「あれ、男だったの？」

えっ

「えっ」

『えっ』

…わからん、のか？

「大体の風貌は分かるけど、声も中性的だし、性別までは…髪の毛長いし、女の人だとてっきり…」

『うめん…』

…いや、良い。 他には？

『イタリア語で雪崩、ヴァランガ。』

響きが嫌だ。

『えー、かつこいいのに。 スワヒリ語で氷、バラフは？』

ピラフに似ているので却下。

「なんだそれ。」

『ドイツ語で雪、シュニー。』

まだマシだが、女らしいな。

「じゃあ候補って事で。」

『イタリア語で雪、ネーヴェ。』

良くなってきたるじゃないか。他には？

「けっこうノリノリになってきてんねー。」

『北欧神話の「破滅の冬」、フィンブル。』

破滅なんて考えたくも無い、却下。

「え、なんで？」

破壊と似たような物だと思ってるのか？ 実際は世界の何よりも恐ろしくおぞましい物だぞ、あれは。

『え、なにそれこわい。』

怖いとも。あれに魅入られてしまったら、神でさえ終わるからな。

「対処はどうやんの？」

気づいてないフリか全力で逃走のみ。

『レベルを上げて物理で殴ればいい、ですね分かります。』

いや、戦闘はするな。

「そういう言い回しがあるんだって。 結局最後に頼れるのは己の体のみとか何とか。」

なるほど、それならその通りだな。で、他には？

『これで最後、ロシア語で氷、レド。』

短いし、いいな。それにする。

「かるっ！」

基本的に、お前たちが呼びやすい物ならそれでいいからな。

「なんだそれー。」

『じゃあ決定ねー。居候さんあらためレドさん、ここに爆誕！』

いや生まれては無いと思うが。

7・星の瞬き、炎の揺らめきと緩やかな時間。

【閑話】（後書き）

「」がエリオット、

『』が「彼女」、

―が元居候さんです。

本編を書いていて、いざイベントを入れようとしたら長くなっちゃったので、閑話として分けました。

そうそう、「彼女」の名前は楓さんです。ずっと気に入ってた名前なので、使えて嬉しいです。本編には出ないんですけどね！。

そしてレドさんが説明したがりの説教したがりで非常に困ってます。本当にどうしようこの子。

8・たよつならと手を振る時間と生き延びた悪意の歓喜の声（前書き）

10/10/11

変な言い回しとかを微妙に手直し

8・さよならと手を振る時間と生き延びた悪意の歓喜の声

ぎちり、ぎちり、ぎちり

何処か で歪な音がした。

ぎちり、ぎちり、ぎちり

それはまるで笑いごえで

エリオットは、何日たっても人の姿のままだった。

マコトが言うには、彼に掛けられた術は全て解けている。だが、なぜかエリオットは何をやっても人の姿以外にはなれず、どんな魔術を使おうとしても、氷の茨しか出てこなかった。医者は、彼の事を「形術士」、決まった形の魔術しか使えない魔術士だと言った。だから、一族特有の魔術も使えないと。

己の息子の現実を聞いて、マコトは失望したようにため息を突いたが、仕事先から戻ってきたアリアーナは純粹に彼が無事だった事を喜んだ。だからエリオットは時間が許す限り母に抱きついていた。

いくら謝罪されたと言われても、傷ついた心はそんな簡単には治らないため、彼はわざと羨ましそうにこちらを見ている目を翌朝まで無視し続けた。サラは一人、そんな主人たちの様子を気にもせず部屋の惨状を片付けていたが。

学校が始まるまで、エリオットは殆ど部屋の中ですごした。本を読んだり、絵を描いたりと過ごし方は様々だったが、基本的に一定以上に厳しい気温は何があるかと嫌いだからだ。朝はいつもの通り起きるが、その後は二度寝に突入したり様々な自堕落な行動を楽しんだ。こんな事ができるのも、幼い今のうちだけだ、と己の幸福をかみ締めながら。

無論そんな日々は飛んで消える訳で。学業に復帰する日の朝、エリオットは憂鬱な気分で見覚え、落ち込みながら支度を済ませ、ため息をつきながら家を出た。灰色が基調となっている制服と、水石をあしらった金のブローチで止められた黒いケープは彼も「彼女」も気に入ってはいたし、学業もあちらの記憶がある「彼女」のおかげで問題は無いのだが、まだ六歳の彼にとって規律に従うのはとても自制心の居る事だった。

「彼女」にやらせようとしても彼のためだといって寝てしまっし、新たに発覚した居候（名前を言おうとしないので、「彼女」が勝手にレドと名づけた）は使えないし……などという事を思いつつ、エリオットは若干の不満と昨日までの日々への憐憫を胸のうちに抱えながら、南へと歩を進めていった。

南方面にたどり着いた彼は、下層へと続く螺旋階段の一つを下りていった。こういっどこからでも海が見える螺旋階段は全て大きめに作られており、ここで散歩の休憩を取っていたりする人も居るち

よつとした憩いのスペースとなっているのだ。そのまま第四層を通り抜け、さらに下の、庶民が住まう第五層にたどり着く。少し歩くと、赤レンガの塀で囲まれた広い円形の敷地が見えた。その中心には高く聳え立つ塔が一つとそれから何本もの白く細いワイヤーみたいなもので繋がられた、一つ一つがユニークな塔が三つ見えた。だが、エリオットはそれが一属性に付き一つもつけられていない塔である事、つまり合計六つある事を知っていた。

ただし、このSet・ホノーリア「アルフィーネ」トロールカステル魔術学院、通称ホノーリア一貫校は、古の魔術師の塔を利用して「非常に歴史豊かな」場所でもあり、風貌ははつきり言って大昔に打ち捨てられた遺跡さながらなので、捻りも無くそのまま「遺跡」と呼ばれている。特に「大地の塔」はコケや草が表面を殆ど覆っている上、所々から大きな木がその頭を伸ばしているのが見受けられるほどである。中身は一括して欠片も綻びの無い石の廊下や希少な宝石のみで出来た部屋、鏡のようなキッチンや生徒なら誰でも使える木張りの入浴場など、エリオットより上の貴族も驚くような施設が惜しげもなく作られているのだが、やはり外側から見ると朽ち果てていると言いたくなるような外見を持っているのである。

そんな仇名を付けられないように、外側も綺麗にしようという企画も定期的に出されている、とエリオットは社会の授業で聞いた事があった。だが、今までずっと本当に崩れ落ちてしまわない程度には修繕されているので、毎回立ち消えになっていると担当は言っていた。

彼が今居るここから左手に見える、不自然に大きく広い敷地は、訓練場であり運動場であり、イベントの際には闘技場のような建物が設置され諸々の用途をこなすマルチな会場にも変化する、使い勝手が非常に高いオープンスペースとなっている。

今、彼が向かっているのは「心の塔」という名の中心にある塔である。保育部から小等部までは全員がここで過ごし、基礎を学ぶ。

中等部に入るときに才能と好みをすり合わせ、囲んでいる属性の塔のどれか、または心の塔をそのまま上っていくかを決める事になる。基本的には、魔術の素養がある者は属性の塔を、そうでない者は心の塔を選ぶ事になっている。

エリオットと「彼女」は、つい最近の騒動が起こるまでは属性のどれかに入って魔術師になろうと思っていた。だが、これからいくら修練を積もうとも、ともに魔術一つ使えないんじゃないかと二人してため息を付いた。

その事を相談した際、レドは今は勉強に専念しろと言った。確かに中等部の心配をするには、まだまだ彼には時間が余りあってお釣りが来るほどであった。それに、彼も「彼女」もちまました作業が好きなので、たった一つ必要な才を持っていれば簡単になれる。「魔具士」になるのも悪くは無いというのが総意だった。

そう、通常こんなそこらにある物でも売り物に出来るような職ならば、大半がそれになろうとするだろう。現に、魔具士の入門クラスは楽しそうとしている生徒達で溢れかえっているのだ。それでも引く手数多である理由は、ひとえに魔力のコントローラーが難しいという事だけである。

簡単に説明をすると、物質や生物はすべて固有の魔力を持っている。それはそれ自体の形、材質、作られた気候や方法など、その他諸々で変わってくる。己のような体を持たぬもの、または高位の存在や魔術師ともなると、それらの違いはまるで生命が奏でる歌のように聞こえるのだとレドは言っていた。同じ種族にはある程度同じ

旋律が組み込まれているし、同じような環境にあるものは似通った歌を奏でるが、それでも同じ「声」を響かせる存在はこの世に一人としていない、とも。殆ど同じ存在と言ってもいい、エリオットと「彼女」の歌が違うように。

違う歌を上手く組み合わせるのは、やっぱり言っても難しい。だから、魔具士になるには天賦の際か、並ならぬ集中力が必要なのだ。その点、エリオットは必要な物がすでに揃っていた。音楽に造詣の深い「彼女」、魔具作りのなんたるかを知っているレド、そして手先が器用な自分。やろうと思えば今からでもできるこの最強チームにかかれば、魔具士になる事なぞ造作も無いのだった。

そしてエリオットは、校章と無駄に荘厳な装飾がされた銀細工の北門をくぐり、それから五年も通う事になる彼の学び舎に再び足を踏み入れた。

8・さよならと手を振る時間と生き延びた悪意の歓喜の声（後書き）

読んで下さっている皆様に、心の底から感謝の念と愛をお送りさせていただきます。（、、） あ、愛はいらなかったら投げ返してください。 食べますんで。

さて、氷の茨は呪いか祝福か？ タイトルにも答えのカケラが入っています。

今までの歩みと最初の一步

結局、エリオットの妹が誕生したのは彼が七歳になった年だった。

最初の頃こそあまり可愛いとも思えずにサラの手伝いをしていた彼であったが、彼女が三歳になる頃にもなると、己とは似ても付かないプラチナブロンドのふわふわした髪とヘーゼルの大きな瞳、そしてよく笑う無邪気な顔にエリオットは遅まきながらノックアウトされた。彼女の名はマチルダハヅキシユヴェデー、淡い二色で飾られた薔薇の名を冠された、シユヴェデー家の珠玉である。

「可愛いなあ」

「可愛いねえ」

「可愛いな」

「…家族バカ、とでも名づけましょうかね…」

早めに夕食を食べ終え、ぐっすり寝入っている彼女を眺めているマコト、アリアーナ、エリオットの三人を見やり、サラはぼそり一人ごちた。彼らの声は静かで小さく、自分達の宝が起きないようにそっとそっと交わされていた。

「…そういえば、母方の祖母に良く似ているな。」

とアリアーナが言った。それにマコトは顔を輝かせ、彼女を抱き寄せつつ答えた。

「そうなんだ、さすが君の血筋だね。とつても可愛い子を持って僕は幸せだよ。もちろん君のほづが可愛いけどね。」

「…ちよつと、マコト…」

「まあまあ、マチルダは寝てるし、エリーはいい子だから見ないフリして…」

「あげる訳ないでしょ、夕食どうすんの？」 エリオットは二人をドアのほづに追いやった。「さっさと食べないと冷めちゃうよ？」

「ちえーっ」

マコトはしぶしぶ手を放し歩いていった。

「父さん、あんた今いくつだよ…」 彼らの傍でくすくす笑っているだけで、なんの役にもたつてくれないサラに非難の目を向けながらエリオットは額に手をやった。

「すまない、さっきちよつと酒を飲ませてしまった…」

「原因は母さんかよ…道理で変になってると思ったよ。ほんとやめてよねー。」

「ごめんな、ありがとう。」

「別に良いけどさー。」

「…じゃあ、頼んだよ、ダイキ君。」

「はい、奥様。」

漆黒の髪と瞳を持った、燕尾服の青年がふかぶかと頭を下げた。彼は、家族がマチルダのお付をどうしようかと迷っていた際に、偶然マコトを頼ってきたヒトである。マコトいわく、彼の血筋に代々仕えてきた一族の末裔であり、当主の命令には絶対服従する、珍しく忠誠心の強い魔族だ。名前はダイキイイチジョウ。普段はきちりとボタンを締め、必要とあらばどのような武器さえも軽々と扱い敵を打ち倒す、なんでも完璧にこなす最強執事だがエリオットとは悪戯を仕掛けあう間柄である。

年を重ねるごとに、エリオットのやわらかかった髪は父のそのように硬くなり、黒味を増していった。九つの頃になると貴族らしく、毛先が肩甲骨の半分辺りに届くか届かないかというあたりまで伸ばし、緑色のシルクのリボンで緩く纏めるようになった。さらに、元は周りと同程度の背丈であった彼も、少々ではあるが魔族らしく高いと言えるほどになった上同年代の中でもっとも腕力が強くなっていた。本人曰く、その上周りの誰よりもかつこよくなってきたるらしいが、事情を知る者達全員に生暖かい目で見られている事も気にせず毎朝それをやるのだから、ある意味羨ましいとは「彼女」とレドの総意である。

また、髪が黒くなるにつれて、彼の顔の左側に文様が現れ始めた。

エリオットが十歳になった年のある夜、ソファでくつろいでいるマコトに聞いたところ、それは人と魔族の混血である証拠であり心配する必要は無いと言われた。

「魔族や魔物との混血だと、エリオットののように文様が現れたり本
当の姿が人間では無かったりなどの症状が出るんだよ。」

「そうなんだ…でもなんでもっとちっちゃい頃はなかったの？」

「小さい頃は魔力を作れる器官が小さいし、弱いからね。血液中
に含まれてる量が少なすぎて出てなかったんだろっねえ。それに、
私の変化術も掛かってたし。」

「ふーん。…あれ、でもマチルダは最初から人の姿だって言っ
たよね？」

「ああ、うん。さっき言ったように、魔力を作る器官が弱いと、
血液に含まれてるその量が少ないのね。ここまでは分かってるね
？」

「うん。」　こくりとエリオットは頷いた。

「つまり、生まれた直後は、マジリは全員どんなに魔族の血が濃く
ても人間よりなんだ。体の全てが魔力で出来てるわけじゃないか
らね。君は…強いのか拮抗してるのかは分からないけど、とりあ
えず元の姿が人間ではない程にはこちら側の血が濃い。逆に、マ
チルダのように人間の血が濃い場合、人間のまま生まれてくるし、
器官が君のように生長し続けるって事はないんだ。」

「へー。成長し続けないうって事は、いつごろ止まるの？」

「人間はたしかー…五〜八歳ぐらいだったかな。その時の資質で
魔術ランクが決まるって聞いたよ。」

「ふーん。 ありがとう。」

「どういたしまして。 ところでだっこさせてくれる気はあるかい？」

「別にいいけどさ…父さんってほんと脈絡もなく内容変えるよね。」

よいこらせ、とエリオットは腕を広げて待っている父のひざに上って体を落ち着けた。 一旦腕を回してぎゅっと抱きしめた後、マコトはエリオットの頭を撫で始め嬉しそうな顔で返答した。

「それ、昨日アリアーナにも言われたよ。」

「あ、そう…」

エリオットは突っ込む気も失せ、仄かに酒の香りがする上機嫌な父親に、就寝時間まで付き合ってたのだった。

そうこうしてる内に時が経ち、エリオットは11歳となった。 中等部に入り、将来の指針を決める時がきたのである。 結論から言つて、エリオットは心の塔を上る事になった。 形術では魔術師としての授業についていけないと担任に言われたからである。 という訳で、もちろん魔具士になる方向に行く事にした彼は、二人の後押しを受けながら「遺跡」の各玄関脇から入れるエントランスオフイスに願書を出しにいった。

現在は夏休みという事もあり、構内には夏期講習を受けている生徒などしかおらず、いつもはこった返している吹き抜けの玄関や中央

で絡み合う四本の螺旋階段は閑散としていた。 エリオットは己の背丈の何倍もある北玄関の扉をくぐり、左の部屋に行くか右の部屋に行くか迷った挙句、右の方に歩を向けた。そこは学校の顔である受付も兼ねているだけあって見栄えも良く考えて作られており、構内よりさらに磨き上げられた白い石と深い青のインテリア、そして所狭しとならんだ大きな窓から見える、緑に溢れた敷地と赤レンガの対比は誰しもが一度は見ほれた事があるほどに美しい。そこで働く人々は思い思いの色彩でさんざめき、陽光の元で光る白に刻一刻と変り行く、生きた絵画を描いているかのようだった。

「こんにちはー」

エリオットは「Registrar」と書かれている看板の下の受付に声をかけた。長い茶色の髪の毛の三つ編みを肩に流したその女性は、一瞬あたりを見渡した後彼に向かって笑みを溢した。

「こんにちは。ご用件は？」

「中等部のスケジュール申請です。」

「承りました。保護者様はどちらにおられますか？」

「忙しくてこれませんでした。必要な書類はこれです。」

「では拝見させていただきます。生徒証はお持ちでしょうか？」

「はい、お持ちです。」

彼は財布の中からカードを取り出し、受付のデスクの上にぺふっとおいた。受付嬢は可愛い物を見たとても言いたげに目を細め、

カードを受け取り検分した。二分ほど彼女はそのまま手元でござって、まだまだ顎がようやくデスクを超えたばかりの彼には、彼女が何をやっているのははわからなかった。

「…はい、では一つ確認させていただきます。魔具士クラスの状況は理解しておられますか？」

「…しています。」

「分かりました、ではこちらの紙にサインをお願いします。…下敷きはこちらです。」

「ありがとうございます。」

エリオットはそれらを受け取り、デスクに備え付けの羽ペンでざらりとサインし彼女に返した。彼女はそれをチェックし、一つづつなぞいた。

「…はい、不備はありません。手続きは完了しました。貴方に幸運が訪れますように。」

エリオットは笑って同じ文句を返した。

「ありがとうございます。貴方にも幸運を。」

そして時はあっという間に流れ、エリオットにとっては早すぎる学期の始まりが来た。

中等部一年目、夏四月、四週風日（第一日目）、選択科目（魔具士）

多い多いといわれるだけあって、魔具士のクラスは立ち見が出るほど受講者がいた。エリオットは念にも念を入れて半時ほど前から席を取りに来たのだが、それでも半分以上埋まっていたのだからこのクラスの人気がどれほどの物なのかがわかるだろう。

どちらにせよ、エリオットは一人端っこのほうで淡々と本を読むしかなかった。友は全員通常科目以外では完全に離れ離れになってしまった上、面倒くさがりかつ人見知りのエリオットが「彼女」の説教に耳も貸さず一から友達を作るのを億劫がったのだ。周りから話しかけてくる子供達に適当に相槌をうつてやりながら、彼はいつ授業が始まるのかなと考えていた。

と、いきなりクラスが静まり返った。大人が二人入ってきたのだ。一人は長い純白の髪と髭を蓄えて、モノクルを左目に掛けている優しそうな老人。もう一人は目つきが悪く、フレームの無い眼鏡をかけ、短いブルーネットを軽く後ろに流した、一見悪役に見える無愛想な若い男だった。彼らは自分達を教授だと言い、これから適正のありなしをテストすると言った。

その言葉に生徒達は色めき立ち、きゃあきゃあとお互い声をかけあった。エリオットは魔具作りの基礎という基礎は全て夏休みの間に、暇を持て余したレドに叩き込まれていたのであまり心配はしていなかったが、回りの生徒達は顔を引き締めたり、逆に興奮して早口で喋っていたりと様々なリアクションを見せていた。

「静かに！」とブルーネットが言った。「これから生徒番号順に名前を呼ぶ。呼ばれたら、すみやかに前に来てこの玉に魔力を入れる事。その出来で残れるか否かを判断する。分かったな？では、ポール！！イオ！！フライハルト！」

…そしてようやくほとんどのテストが終わった時。合格していたのはたった二人だった。エリオットはそろそろ己の番かな、と思いつながら心配性すぎるレドの最終講義に適当に相槌を打っていた。

「シャノン！！フロイライン！！ヴェルティア、不合格だ。」

「も、もう少し！ 後もう少し時間を…！」 零れ落ちるような金髪の子が懇願していた。

「ならん。速やかに退出せよ。」

「そ、そこをなんとか…！」

「ミス・ヴェルティア、」

老人が始めて口を開いた。

「君の気持ちは分かる。だがのう、他にも生徒はいるし、現に二人ほどまったく同じ内容で合格している子もおるのだよ。」

「う…！」

「知っていると思うが、魔具士というのは、魔力を物にこめれる才能が必要なのだ。君は偶然にもそれを授からずに生まれてきてしまっただけはあるが、それがないと魔具士は到底務まらない。」

他にもすばらしい役職は沢山ある。君の才能を十分に発揮できる役職もな。」

「…はい、すみませんでした。」

「分かってくれたかの、いい子じゃ。よい日を。」

「…よい日を。」

彼女は肩を落としながら退出した。

「エリオット…ツカサ…シュヴェデール！」

エリオットは本をかばんに入れながら立ち上がり、教卓の前へと進んだ。もはや言うのも面倒になったのか、ブルーネットは無言で彼の目の前に透明な珠を置いた。

さあ、我が調教の成果、見せてもらおうぞ！

『レドさん、言い方キモイよ？』

?!

エリオットは中の二人の会話を無視しながら珠を取り、目を閉じた。それから体の中で河をなしている魔力に集中し、意識を指先の方に移動させた。そこからは簡単なのだ。レドの耳を使って魔力の流れを音に変え、己の詩を「彼女」の音楽の知識を使って少しずつ玉の歌に合わせて絡めて行く。最初は歌に拒絶されないように、驚かせないように、優しく。そして慣れるにつれてどんどん遠慮を脱ぎ捨てながらつぎ込んでいった。

彼が目を開けたときには、その珠は透明であった頃の名残なぞ欠片も見せず、薄い青色に彩られた宝玉になっていた。それを見て、ブルーネットは目を見開き硬直しており、爺さんのほうは興味深げに珠を観察していた。その反応に三人は少し抑えるべきだったかと身構えたが、老人が文句なしの合格だと言ったので一先ず胸をなでおろした。

ただ、ブルーネットとそこにいた生徒達のほうは、エリオットが適当に場所を見つけて座ったあたりでようやく我に返っていた。そして全員がテストを受け終わった時、残っていたのはエリオットを含め四人だけであった。

よくやったぞ、エリー！

あざーす。

『おめでとつ。』

うん、ありがとう。

「彼女」はそれには答えず、また夢幻の世界に戻った。

…なあ、最近私に対する態度がぞんざいになってきている気がするんだが。

気のせい、気のせい。

今までの歩みと最初の一步（後書き）

早いもので、エリオットも中学生になりました。（、、）
長いプロローグにお付き合いくださり、真にありがとうございました。

これからはたまにシリアス、基本グダリ、たまに全力の遊びで統一する事になります。

また、この章は、彼が高等部に入るまでを描きます。魔具士は職人扱いで高等部より上の「専門部」（いわゆる大学）に入る事はありませんので、直で仕事偏へと移行します。

さらに、いきなり仕事偏を書き始めたり、高等部偏を書き始めたりと、時系列順に掲載しない場合がありますので、ご容赦くだされば幸いです。

大人って…汚い、よね。

後に彼は語った。

「あんな授業、予想だにしてませんでした。」…と。

中等部一年目、秋一月、一週光日、選択科目（魔具士）

授業開始を告げる鐘が「遺跡」の頂上で鳴り響いた時。 エリオットの前にはまさに魔法使いと言いたくなる様な、長い白髪と髭を蓄えた、左目のモノクルがきらりと光っている老人がニコニコ笑っていた。

「カーマイン教授…」

「なんじゃのう？」と老人が答えた。

「あの、今って魔具士クラスの授業中ですよね。」

「そうじゃのう。」

彼はあくまでもその笑顔を絶やさない。

「では、少々聞きたい事があるのですが。」

「言ってみい。」

「…なぜ、私は。」

「ふむ？」

「…なぜ、私達は…こんな所に、いるのでしょうか？」

そう、エリオットの眼前には今、鏡のように磨き上げられた料理室の作業台とコンロがきらりと光っていた。彼の体にはベージュのエプロン、頭には三角頭巾が装備されており、シャツは肘の上まで捲り上げられていた。

「しかたがないじゃろ、お前さんは一年生で習う部分をすでに知っておるんじゃ。基本中の基本は終わった事じゃし、応用編に行っただ方が楽しいじゃろ？」

小首をかしげて まさか可愛らしい感を出そうとしてるんじゃあるまいな、とエリオットは思った カーマインはエリオットを見た。

「いや、まあ、それはそうですね…でも、ある意味我流ですし、やっぱり正規の方法で習ったほうが宜しいのではないか、と私として…」

「どんな理由があるかは知らないが、」とカーマインはエリオットの言葉に被せながらゆっくりと続けた。「このホレイト・カーマイン、年を食っているだけあって色々な体験をしてきておっつての。」

「え、はあ…」

いきなり自分語りをはじめた目の前の男に、エリオットは戸惑いを隠しきれずも大人しく聞く事にした。

「だからこそ断言できる事柄、という物があつての。…まあ、端的に言つと、お前さんがテストでたたき出した結果。あれは、初心者では【不可能なほどに完璧】だったのだよ。」

「…」

「別に、私はお前さんの背景に興味はない。詮索をする気もない。そして私は、国の為になるのなら鼠にすら喜んで知識を与える人間だ。」

カーマインは手をふり、濃いオレンジ色の一人用ソファを出して座った。彼はエリオットを見上げ、笑みを消して続けた。

「お前の事情は知らされていないが、それでも今までの記録を見れば、色々と推測は出来る。それに、テストの時の反応を見る限り、お前には危機感が足りていないようだし。…そもそも、初心者であるべきお前が、あれほどの事をいとも簡単にやれるという事は、普通では大騒ぎになつてもおかしくない所だったぞ？ 本当に何を考えていたんだ？」

「あ、の…」

「何にも、だろう。お前に関する今までの記録には、深く物事を考えずに行動してしまう事が多いと書いてあった。今回もその類だろう。」

「う…」

それを見て、カーマインは一つため息をついた。

「まったく、私がごまかしてやったから良いようなもの…：まあいい、説教は後だ。お前、私の弟子になる気はないか？」

「え、で、弟子、ですか？」

「ああ、協力者がいたほうが、何かと都合のいい事もあるだろう？
：私の庇護下にいれば、色々にごまかせる事柄も多くなるしな。
どうだ？ 悪い話ではなかる？」

「え、と…」

エリオットは考え込んだ後、今すぐ相談できる仲間に助けを求めた。

《：脳内会議員の皆さん！ お願いします！》

お前な…おい、起きてるか？

『今起きた。 我に任せるがいいわ、愚民ども！』

お前はいつたいたいこの魔王だ。

《お願いします…。》

『おう、やってやんよ。』

……

「…代わりに？」

いくらか静けさが部屋を支配した後、唐突にエリオットが喋りだした。

「ん？」

「こちらに協力する代わりに…教授は何を、望むのです？」

カーマインは、それはそれは嬉しそうに、暗い瞳でニタリと笑った。

「そうだな…まずは、そちらの保有している、私が知らない知識。そして、さっきも言ったように、私の弟子となる事。」

「二つ目は喜んでお受けしますが、一つ目は…」

「ああ、別に一部だけで良い。そちらが開示できると判断した物だけで。…そうそう、ついでに、今喋っているお前の名前も教えてくれるとありがたいがな？」

「…なんの、事です？」

エリオットは本当に分からないという顔でカーマインを見上げた。

「とぼけるな。似せようとはしているようだが、口調も声の出し方もシュヴェデル君とは別の物だ。」

「…そうですか、さすがというべきですかね。私は名前を捧げました。すでに私は、ただの過去の亡霊です。」

「ふむ…捧げたのは、シュヴェデル君にかね？」

「はい。」

「なるほどな。…まあ、いい。そうそう、最後の条件を忘れていた。」

「なんでしょう。」

「これから、最低一週間に一回は私が規定する方法で菓子を作り、私に収める事。」

「…は？」

たつぷり一分固まった後、エリオットはカーマインを見て、調理台の上に乗っかっている材料と器具、そしてレシピの本を見やり、またカーマインを見た。

「菓子、ですか？」

「菓子、だ。」

「…」

「…」

「…なぜ、菓子なんですか？」

「二年生からの授業内容でもあるからだ。基本的には、光、風、水のうち、光日にあるラボで菓子作りをして貰う。」

「…魔具士クラスで、菓子？」

「魔具にできる対象が、元から完成されている物だけだとも思っていたのか？」

《…レドさん？》

…おそらく、私の知らぬ内に進化したのだろうな。

『んなアホな…』

「良いかね、シュヴェデル君。…と、その中のヒト。」

「あ、待って下さい。今変ります。」

「良いだろう。」

……

「…あの、」

「変ったか、なら続けるぞ。良いか、魔具という物は、この世界の全てが対象となる。特に料理は、作っている途中ずっと魔力を注ぎ込み続けるだけあって効果も強くなるし、己の持続力も増す。何より、食物ならば持ち運びも簡単に出来、一見では魔具と見破られにくい上、美味しく出来た物は入れられた魔法の効果を底上げする。」

「あ、知ってます。たしか美味しい物を食べる事って精神的に安定するんでしたよね。精神を病んでるヒトにはちょうどいい自然療法だとか…」

「ほう、そうなのか。」

「…えっ?」

「…まあいい、とにかく食物を魔具にする事には色々とメリットがある。それに、比較的簡単だからな。ひょっこにはちょうどいいのだよ。」

「なるほど…でも、それなら普通の料理とかでも宜しいのではないですか?」

「食ってて楽しいもののほうが、やる気が出るだろう?」

「…ああ、甘い物好きなんですか…あれ？ …あの…もしかして私をかばってくれたのって」

にやり、と全ての猫を脱ぎ去ったカーマインは、自分の物になった菓子生産機に向かいさらにあくどい笑みを溢し、さっさと作り始めると命令したのだった。

「ふむ、貴族のお坊ちゃんだというから味は期待していなかったが…なかなかどうして、美味ではないか。文句なしの満点だ。しかし、これはなんとという菓子だ？ その本には載っていない奴のようだが。」

「あの、載ってる物は、私には少々ばかり難しすぎて…チョコチップ入りのパウンドケーキを作ってみました。」

「チョコチップ？ チョコレートを砕いたこれの事か？」

「あ、はい。チップには破片という意味がありますから、チョコレート破片でチョコチップとなります。」

「ほう、ではパウンドというのは？」

「え、ええと…遠い国の重さの単位です。基本的にはメインの材料が全て同じ重さなので、重さの単位が名前についてるんです。誰でも作れる、簡単なお菓子なんです。」

「なるほど、では宿題だ。 風日までに今回の実験の感想、工程および実験中に感じた問題点とその改善策、そしてレシピを提出するよつこ。」

「レシピですか？」

「まずい物を食べずにすむなら、それに越した事はないからな。」

「…苦労、なさってるんですね。」

大人って…汚い、よね。（後書き）

《》はエリオットが人前にいて、喋りかけられない場合の呼びかけを意味しています。 疲れるので殆どやりませんけどね。

カーマイン教授は、菓子好きのくせに痩せてます。 羨ましい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9620v/>

ひとひら、流れと、香り立ち。

2011年10月19日03時08分発行